

大道寺友山『武道初心集』考

はじめに

近世において、いわゆる「武士道書」とはいかなる位置づけにあったのか―この点に対して明確に答えられる研究者はどれほどいるだろう。「武士道」という用語が明治以降盛んに用いられるようになったのは今更言うまでもないが、いざ近世に目を向けてその思想に触れようとしても、我々は「武士道」という用語が脆弱な定義しか持ち得ない現状にぶつかるといえる。その背景には教訓としての武士道があつても「武士道書」の位置づけを困難にさせているからだろう。

明治期後半から昭和戦前期にかけて、数多くの「武士

中嶋 英介

道書」が翻刻された。特に日露戦争末期・昭和戦前期に時代社より発行された『武士道叢書』（一九〇五）・『武士道全書』（一九四二〜四四）の登場によって、武士道について網羅された―正確に言えば彼らが「武士道的」と推測した―教訓書に触れる機会も増えた^①。一方でこれらに所収されている教訓書には抄録が混在し、解説もやや冷静さに欠ける嫌いがある為か、戦後以降それらを積極的に採用した研究はあまりにも少ない。確かに両書内の資料を扱うには、これらが発行された時代状況を含め綿密な考察が必要だろうが、今となつては貴重な資料も多く、その資料的価値を失つたとは一概に言えない。それにもかかわらず、『武士道書』を取り扱う研究がこれほどまでに下火の状況なのはなぜだろうか。

その理由の一つは両書の収載傾向にある。『武士道叢書』・『武士道全書』の収載を見ると武士道のカテゴリーに含められるか否か不明瞭な教訓書も多く、研究対象の取捨選択を困難にさせている事情がある。また、教訓書一つ一つが紹介される上に著者の出自が見えにくい現状も見逃せない。著者の学派的位置づけや他の書との繋がりを含めた考察をすることではじめて教訓書の意味づけが可能となるにもかかわらず、それを突破するまでの情報がないまま時が過ぎ去り、資料の置き去り状態が続いている。底本を見ても個人蔵書が多く所在が判然としない事情を思えば、研究が遅々として進まないのも頷ける。我々はあらためて武士道そのものの定義を含め、「武士道書」の取り扱いの難しさにぶつかるのである。

こうした現状を踏まえて武士道論を検討するには、一つ一つの書に対し、それぞれの特徴を把握した上で光を当てなければならぬ。つまり底本が明確であること、著者の出自がある程度明らかであること、学統や他の著書との繋がりを見出し得ること―これらの条件を満たした書に光をあてることで、武士道論の再考に明確な意味を持たせる道筋となるだろう。本稿にて取り上げる『武

士道叢書』・『武士道全書』両書共に版本として収録されている大道寺友山の『武道初心集』（享保一二年（一七二七）奥書）はこれらの条件を満たし、さらには版本・異本が登場したという経緯から見ても、他の武士道書とは一線を画す。

『武道初心集』はこれまで二つの側面から考察されてきた。一つは「儒教的士道論」という枠組みの中でとりあげた教訓書としての考察、もう一つは享保期に成立した原本系と、約一世紀後の天保期に松代藩内で出版された、いわゆる松代版との比較考察である。前者は官僚武士への規範として成立した「儒学的」と言われる士道論と、戦国的威風を備えた「伝統的」といわれる武士道論の枠組みから『武道初心集』を考察した研究である。相良亨は大道寺友山を山鹿素行の弟子であった点に着目して、『武道初心集』を士道論的側面の備わった武士道書と規定した³⁾。その後も大道寺友山の思想は『武道初心集』を中心に考察され、時に士道・武士道論の中で「中間的」存在として捉えられることもあった。ただし大道寺友山の著書を見たとき、『武道初心集』自体は友山自身が著した家康説話（『駿河土産』・『岩淵夜話』）上の教訓を取り

入れつつ、そこに友山個人の考えが合わさった形で成立した書であつて、単に士道・武士道論という枠組みのもとで捉えられるわけではない⁴⁾。従来の先行研究では『武道初心集』の内容を一部取り上げるにとどまったため、周辺文献との繋がりが見えにくくなる事態に陥つたわけだが、この傾向は後者の松代版との比較考察にもあてはまる。

詳しくは本論に譲るが、先行研究における原本系・松代版の比較検討は数項目を取り上げたに過ぎず、書誌的検討及び流通の過程について充分に検討されているとはいえない。特に先行研究において用いられた原本系については、他の所蔵が確認されながらも一種類のみの採用にとどまり、再考の余地がある。本稿では写本と版本との比較検討の前段階として原本系の幅広い分布に着目し、『武道初心集』がいかなる経緯のもとで発行されたかを検討する。

一、『武道初心集』の展開

『武道初心集』は友山原著とされる原本系と、その約

一世紀を経て発行されたいわゆる松代版（天保五年（一八三五）版）が存在する。原本系は最古のもので享保二年の奥書が付されている。友山による序文・奥書は見られず、自筆本は存在しない。計五六項目、項目名はなし。

一方、松代版『武道初心集』は原本成立後約一世紀を経て、松代藩内で出版された木版本である。全四四項目、上・中・下三巻本。各項目にはそれぞれ題目があり、項目順も原本とは異なる⁵⁾。松代版には松代藩儒の鎌原桐山・小林徳方による序文・跋文が付されているが、今、その序文を確認しておこう。

武道初心集。友山大道寺翁所_レ著也。其書細_二写流俗之弊_一。丁寧告誡。発蒙之意至矣。蓋世所_レ伝五十六條。剩語頗多。紕繆不_レ尠。今觀_二此編_一。約為三十四條。語簡而意暢。比_二諸世所_レ伝者_一。極為三善本_二矣。（松代版『武道初心集』序文）

序文によれば、世に伝わるころの五六条本は「剩語」「紕繆」が多く、世俗の入り混じった箇所が見られ、間違ひも少なくない。それを修正・削除し、四四条に纏める事で世に伝わる五六条本よりも善本となつたという。

跋文においても『武道初心集』を藩の子弟に広めるべく、原本系を改訂して松代版が発行された経緯がうかがえる。

藩大夫恩田公準、武道初心集三巻を蔵す、嘗て是を家に刻し鬮藩の子弟に恵んと欲す、然るに其辞の俚俗に近きを以て、人の侮慢し易きを恐る、故にいまだ是を果さず、想ふに伝写の誤り然らしむる歟、書肆名山閣是事を知り来て予に請て云く、嘗て此書名を聞て、汎く世に求ること久しかりき、然るに猶いまだ得るに至らず、願くは為に是を謀れ、予終に是を乞得て書肆に授く、將に刻せんとして訂字を予に求む、是に於て字体音訓、古に就て正すといへども、畜を畜となし命を命となし弟を弟となすの類ひ、旧習に走らざるを得ず、固より子弟の読易きを欲すれば也、

かくして『武道初心集』といえは松代版を指すようになつたらしく、松代藩家老恩田公準（一七九八〜一八六二）の支援により成立した公刊本の色彩を帯びて『武道初心集』は全国的に広まった。明治二七年（一八九四）の活字化を皮切りに松代版『武道初心集』が次々翻刻された。『大日本思想全集』・『大日本文庫 武士道集』・『日

本教育文庫 訓誡篇』・『日本国粹全書』・『武士道叢書』・『武士道全書』所収の『武道初心集』はいずれも松代版であり、件の書は「武士道」を称揚した教訓書として紹介されることとなった。

その後昭和一八年（一九四三）、当時一高教授であつた古川哲史が松代在住の太平喜間多のもとにあつた原本系『武道初心集』（高田法古謄写本、現在は真田宝物館蔵）を発見した。古川は『思想』七月号に「二つの武道初心集」（その後同『武士道の思想とその周辺』（福村書店一九五七）第三部所収）を発表し、原本系統と松代版の差異が明らかにされた。ついで同年一月には佐藤堅司編著のもとで、古川が発表した原本系とは底本を異にする『完本武道初心集』（三教書院 一九四三）が発行され、原本系『武道初心集』の登場によつて松代版・原本系との性格の違いとともに、原本系が各地に点在することが判明した。⁹⁾

こうした経緯のもとで、松代版序文にて言われた「詠語」・「紕繆」を含める原本系『武道初心集』に光が当てられることになる。古川哲史に続き、武田矩直は松代版評価の視点から原本系にて削除された箇所をいくつか指

摘し、松代版の削除傾向はある程度明らかにされた⁽⁸⁾。しかし原本系の「剩語」・「紕繆」に着目するだけで、原本・松代版の正確な比較検討が可能なのだろうか。彼らの比較作業を評価する前に、いくつかの前提に立つて考察せねばなるまい。

その一つが諸本の考察である。松代版序文「世所伝者」、及び跋文の「藩大夫恩田公準。武道初心集三巻を蔵す」の一節を見ればわかるように、原本系『武道初心集』は松代版の発行以前よりある程度広まっていた。恩田公準が所有していた『武道初心集』三巻をもとに松代版が成立した事情を踏まえると、原本系たる『武道初心集』の写本を検討しなければ、本来の比較検討には辿り着けないだろう。恩田公準蔵の『武道初心集』と高田法古騰写本がいかなる繋がりがあるかは不明だが、この時点で計二種の『武道初心集』が存在するかもしれないのである。

この点に鑑み、改めて古川・武田による比較検討を見つめよう。古川が「原本」として紹介した『武道初心集』の写本は松代藩士高田法古騰写本の種類であるが、恩田公準所収本をもとにして仕上がった松代版を思えば、

一種類のみの比較だけでその違いを提示すること自体、有効な手段といえないだろう。また、『武道初心集』に複数の原本系が現存するという事実は、既に佐藤堅司によって指摘されていた。古川・武田両氏がなぜこの点に着目しなかったのかは不明だが、様々な写本が点在する事実を踏まえた上で比較検討をしなければ、整合性はとり得ない。

もう一つは異本・抜粋本の存在である。『武道初心集』は五六条の原本系だけでなく、中身を異にしながら同名の題目が付された書が存在する。これらは原本系を意識した形跡はあれども、松代版との関連がない。これは原本系の『武道初心集』が松代版の登場を待たずして広まっていた証左ともいえ、松代版序文の「世所伝者」が期せずして判明するわけである。松代版の広まり以前に原本系の流通形態を踏まえた上での考察がされなければ、両氏の着目した「剩語」・「紕繆」の比較段階にまでたどり着けまい。本稿では原本系の分布を中心にして、各々の『武道初心集』の諸本を検討する。

二、『武道初心集』の諸本

『武道初心集』の写本は『拔萃武道初心集』を含めて一二種類確認できるが(『国書総目録』・『日本古典籍総合目録』(『日本古典籍総合目録データベース参照)、古川が参照した高田法古による写本等長野県真田宝物館蔵の書を合わせると、合計一六種類の現存が判明した。今節ではこの他『武道初心集』の異本も紹介し、その諸本を考察する。(1)・(2)は体裁を同じくするため、奥書・解説は(2)の後に付す。

(1) 名古屋蓬左文庫所蔵本(一七二一八九)

名称は『拔萃武道初心集』。四つ目綴。縦二七・九×

横二〇・四センチメートル。原本系の写本。享保一二年(一七二七)抜粋。一卷一冊本。

(2) 京都大学附属図書館所蔵本(八一二二フ 一二)

名称は『拔萃武道初心集』。四つ目綴。縦二八・五×

横二〇・四センチメートル。原本系の写本。全五四丁。

蓬左文庫所蔵本と体裁は同じくする。一行約二六〜二九字、片面一一行書き。奥書は以下の通り。

福井少将宗矩内

山鹿貞直門人(朱―中嶋註)

大道寺祐山篇

享保一二年未八月

内山友右ノ門久雄拔萃

『拔萃武道初心集』は現存する『武道初心集』の中で奥書が最も古い。原本系五六項目のうち、『拔萃武道初心集』は全三〇項目、上・中巻に該当する部分が抜粋されている。中巻終わりに「右是まで上巻下巻下巻（下巻）の抜書也、是より下巻也、不残写申候」(『拔萃武道初心集』二三丁表)とあり、下巻は原本系の通りである。項目の異同はみられない。原本系『武道初心集』上・中巻は合計三八項あるが、『拔萃武道初心集』上・中巻は計一三項である。なお上・中巻の削除方針は松代版とは異なり、いかなる視点のもとで抜粋・削除されたのかは不明である。なお、友山が山鹿素行の弟子であるという位置づけは墓碑銘と『拔萃武道初心集』奥書から確認できる。

(3) 久保義八郎氏所蔵本

名称は『武道初心集』。原本系の写本。天明五年（一七八五）写。上中下三卷本。所在は不明。奥書は以下の通り。

右武道初心集三卷は、源光禎の蔵書を借得てこれを書写するものなり。蓋その作者を詳にせずといふ。やつがれ熟読玩味するに、大道寺孫九郎友山翁の筆するところうたがふべからず。如何となれば、翁の落穂集及他の著述と文勢格相おなじければ、しかはいふなり。又卷末の歌をみるにその令子のためにこの書をつくれること顯然たり。よむ人たれか一唄して三嘆せざるべけむや。

天明五乙巳歲秋九月廿二日之夜功畢

村尾氏源祐誠識

『完本武道初心集』（佐藤堅司編 三教書院 一九四

三）の底本。全五六項目揃った形態としては最古の写本である。村尾祐誠が『落穂集』等から著者を想像しているところから見ると、『武道初心集』は大道寺友山の名が明記されないまま流通していた事実がうかがえる。

(4) 『鶯宿雜記』（卷二二〇・二二二）所収本（二三三八・二三九一―二）

名称は『武道初心集』。明朝綴。縦二四、一×横一六、四センチメートル。原本系の写本。駒井鶯宿写。上下二卷二冊本。上・下巻それぞれ五〇・四九丁。奥書なし。一丁表に「桑名城内駒井家」の判あり。本文一行平均二五〇八字、片面平均一一行書き。

『鶯宿雜記』（国立国会図書館蔵。〔文化十二年（一八一五）序〕は松平定信に仕えた桑名藩士駒井鶯宿による叢書である。全五六八巻、目録一卷、別録四〇巻。その内容は和歌、俳諧、紀行、風俗、戦国期の戦史、藩や名家の逸話、忠臣伝、孝子伝等多岐にわたる。自筆写本が主であるが、五〇〇巻以降に鶯宿の弟半林や養子晚翠による書き入れが見られる。

(5) 三春町立歴史民俗資料館所蔵本（竹 三七七号）
名称は『武道初心抄』。四つ目綴。縦二七、五×横一八、八センチメートル。原本系の写本。文政八年（一八二五）書写。三卷三冊本。壹・貳・参巻それぞれ四三・三九・

四〇丁。一丁目に「竹鼻」の印あり。一行約二三字。片面一〇行。題名は『武道初心抄』とあるが、抄録ではなく原本系の写本である。奥書は以下の通り。

竹鼻壮角居士六十四歳自序

于時文政八年乙酉八月初旬於武江

麻布飯倉写之、原本信州松代侯

御藩北澤源次兵衛 奥村俊蔵口入

竹鼻家は三春藩主秋田家の分家である。奥書によれば、竹鼻は松代藩士北澤源次兵衛の所有する『武道初心抄』を奥村俊蔵の口利きによつて借り入れ、麻布飯倉の三春藩屋敷にて書写したという。松代藩士が『武道初心集』を所有していたという点は興味深いが、竹鼻による書写以前から『武道初心集』が松代藩内において出回っていたことを意味するだろう。三春藩では江戸詰の藩士が書物を書写して、それを三春に持ち帰る行為が盛んに行われており、友山の著書でいえば、『武道初心抄』の他、『落穂集』・『岩淵夜話』も確認できる。続いて真田宝物館に所蔵されている『武道初心集』をそれぞれ見てみよう。

(6) 真田宝物館所蔵本A (七七 A〇〇一け一三一)

く三)

名称は『武道初心集』。康熙綴。原本系の写本。高田法古贍写。文政二年(一八二八)写。上中下三巻三冊本。上巻一丁表、各巻末に高田法古の印あり。一行約三〇字。片面一〇行。下巻の奥書は以下の通り。

其本先生此書を見て甚美賞し、自ら書して令嗣に授与し、造次も忠義を怠らざるの戒訓とせんと欲す、然れ共病で後執筆に懶し、僕に代筆せよと仍辞する事あたはず

つたなきもわすれてうつつ筆の跡われもかたみとおもふばかりに

玉碎謹書

文政二年歳次戊子夏四月廿八日

高田法古贍写

岩波文庫版(和辻哲郎・古川哲史校訂『武道初心集』(一九四三)の底本。奥書によれば「先生」が『武道初

心集』を跡取りに与え教戒の書としようとしたが、病により高田法古が代筆をつとめた事情が記されている。「玉碎」の詳細は不明。松代藩士高田法古（?）慶応二年（一八六六）は真田幸貫・幸教に仕え、目付役・町奉行等を歴任。佐藤一斎に経学を、山鹿素水に兵学を学んだという⁹⁰。（5）三春町立歴史民俗資料館所蔵本が底本とした『武道初心集』が何を指すのか不明だが、高田法古謄写本の成立事情から鑑みても、一八世紀後半から一九世紀前半に於いて『武道初心集』の書写に次ぐ書写が行われていた事実はうかがえる。

（7）真田宝物館所蔵本B（真田書籍台帳武家訓の一部一―一四）

名称は『武道初心集』。四つ目綴。縦二六×一八センチメートル。原本系の刊本。書写年代不明。上中下三巻三冊本。上中下それぞれ七六・六四・七三丁。各巻はじめに「松代文庫」の印あり。版元・奥書等の書き込みはなし。一行約一七〜二三字。片面七行。

原本系の中では唯一の版本である。「松代文庫」は真田宝物館所蔵の一部に捺印されており、これを松代藩の

藩校文武学校の蔵書印とする説もあるが、確定的な根拠がなく地方史研究の中で議論の余地を残している。⁹¹

（8）真田宝物館所蔵本C（七七A〇〇一―う四四―一―三）

上巻の名称は『武道初心集』、中・下巻は『重修武道初心集稿』。上巻は四つ目綴。縦二八×一九・二センチメートル。上巻は松代版の写本。中・下巻は原本系の写本。書写年代不明。上中下三巻三冊本。上中下それぞれ四九（目次二丁・本文四七丁）・四四丁・三七丁。奥書なし。上―一行一八字。片面九行。中・下―一行約二四字。片面七行。

（8）は本来二種類に分けるところであるが、真田宝物館では一つに纏めているので、便宜上それに従った。上巻は松代版の写本。中・下巻は原本系の写本。奥書が無いため、いかなる経緯で混在されたのかは不明。『重修武道初心集稿』は原本系の写本ではあるが、その上に朱書きで松代版に修正されており、一丁ごとに松代版の項目名や順序の変更を指示している。なお、古川哲史がこの写本に触れた形跡はない。

(9) たつの市立歴史文化資料館 龍野文庫所蔵本 (社会科学一〇五号)

名称は『武道初心集』。縦二三、八×横一六、六センチメートル。原本系の写本。弘化二年(一八四五)書写。上中下三巻一冊本。全一〇四丁。一行約二五〜三二字。片面一〇行。奥書は以下の通り。

于時 弘化二乙巳年十二月中旬写之

龍野文庫所蔵本は下巻の項目順番が一部入れ替わっている。上中巻の項目移動は見られない。龍野文庫は竜野藩の旧蔵書の他、旧藩士の蔵書などを集めたものである。龍野文庫所収の『武道初心集』は竜野藩士家系であった渡辺家により寄贈された。

(10) 小浜市立図書館酒井家文庫所蔵本(一五六、三七七)

名称は『武道初心集』。四つ目綴。縦二六、八×横一九、二センチメートル。原本系の写本。山田定勝写。嘉永二

年(一八四九)書写。上下二巻二冊本。上・下それぞれ四八・四六丁。一丁に「毛呂山田吉令」の印、上下最後の丁に「山田氏所蔵」の印あり。一行約二五〜三〇字。片面一〇行。奥書は以下の通り。

嘉永貳乙酉年六月初浣写之 行年六十四才定勝写

(朱書) 同年八月於東□ (朱書) 男 吉令朱校了

小浜藩右筆山田吉令の旧蔵本。『酒井家文書綜合目録』によれば、酒井家文庫は右筆の山田吉令が幕末から明治にかけて古書店で購入した書を含め、傍輩の蔵書を借りて写した書物が所蔵されている⁽¹²⁾。これによれば山田定勝は、藩士から『武道初心集』を借りて書写したことが想像できよう。

(11) 久留米市立図書館樺島文庫所蔵本(国一一五二(一)〜(二))

題箋は『武学初心集』(ただし本文は『武道初心集』)。縦一六、三×横二三、二センチメートル。四つ目綴。原本系の写本。書写年代不明。乾坤二巻二冊本。乾・坤そ

れぞれ五六・七九丁。序文あり。一行二〇〜二五字。片面九行。序文は以下の通り。

『武道初心集』は、享保十一年丙午初春、大道寺友山八十八歳之賀祝とて、其用事二付参会之節、友山物語に、先年認置たる武道初心集は大將たる人え

ハ云に不及、武恩之下に生、其器に備りたる士に見せべき為にあらず。農人或は□（虫喰—中嶋註）

より初而士に取立られ、又は士に成度志のもの、士になりて仕官に至る者には是を見せなハ、其人之志をみがく種と可成に付、記置たるもの由也。依之友山趣意をここに記す。

『武道初心集』は武士の家に生まれた者よりも、むしろ新たに仕官される士を対象に著された事実が友山の趣意として明記されている。序文によれば友山のいう「初心の武士」の射程は農民を含めた仕官志望者にまで広げられており、その読者層は単に武士のみを指していたわけではなかった。これまでの研究史で取り上げられた武士道書は武士身分を対象とした教訓書として捉えられがちであったが、『武道初心集』自体は武士にとどまらない階層をも想定していた点に注意を払わねばならない。武

士道書はどの階層を対象として著されたのか——内容にとどまらない、読者層を含めた考察が求められよう。樺島文庫は久留米藩儒樺島石梁（明善堂教授）以下五代に渉る蔵書で、明治末期に久留米市立図書館へ寄贈された。

（12）静岡県立図書館葵文庫所蔵本（K 一六八 五〇九）

名称は『武道初心集』。原本系の写本。書写年代不明。天地人三卷三冊本（天・人巻は欠）。地は全七三丁。一丁裏に「私立丁未図書館蔵」の印あり。一行二一〜二五字。片面六行。

葵文庫所蔵本は、二冊が欠本のため、奥書・序文ともに確認できない。葵文庫は蕃書調所・開成所・昌平坂学問所・箱館奉行所など江戸幕府の公的な機関の旧蔵書が徳川家達の駿府移封を機に収納された。私立丁未図書館は明治四〇年（一九〇七）、瑞光寺住職柴田普門、医師松岡友吉、静岡市立商業学校教師三浦元利の三氏によつて静岡県図書館の設置をにらみ設立された。丁未図書館の蔵書は三氏が持ち寄った図書約八〇〇冊と一般市民による寄贈から成り、一九〇九年には六、〇四一冊の蔵書を

数えたという。明治四三年（一九一〇）静岡県教育協会附設静岡図書館の開設に伴い、丁未図書館は蔵書を全て寄贈し、閉館した⁽¹³⁾。「私立丁未図書館蔵」の印が確認できる以上『武道初心集』も、丁未図書館の開館時に個人蔵書として寄贈された可能性が高く、何らかの形で葵文庫に所管されたのかもしれない。以下、松代版『武道初心集』の写本をまとめて紹介する。

(13) 玉川大学附属図書館所蔵本（W七八九。一一―ブ、K）

名称は『武道初心集』。四つ目綴。松代版の写本。書写年代不明。天地人三巻三冊本。天地人それぞれ二六・二一・二八丁。奥書は松代版と同じ。一行二二〜二七字、片面一行。

(14) 東北大学附属図書館狩野文庫所蔵本（狩二―四一九二―三）

名称は『武道初心集』。四つ目綴。縦二三、三×横一六、五センチメートル。松代版の写本。慶応元年（一八六五）写。上中下三巻三冊本。上・中・下それぞれ三二

（うち目次二丁）・二八・三五丁。一行一九〜二三字。片面一〇行。奥書は以下の通り。

慶応元年乙丑年八月

右此本高栗儀人より借用写之

(15) 八戸市立図書館百仙洞文庫所蔵本（仙一〇―四五K）

四つ目綴。縦二六。四×横一八。三センチメートル。松代版の写本。書写年不明。上中下三巻一冊本。全四五丁。一行約三四〜四〇字。片面一二行。奥書なし。(14) 奥書の高栗儀人は小諸藩士。(15) 百仙洞文庫は旧八戸藩士家系の北村益氏の旧蔵書である。文庫名は北村氏の号、百仙洞古心に拠る。⁽¹⁴⁾

(16) 鹿児島県立図書館所蔵本

『完本武道初心集』によれば、原本系の写本。三冊本。二・三巻欠⁽¹⁵⁾。佐藤堅司の調査時には現存していたようだが、同図書館に問い合わせたところ所在不明との回答をいただいた。

【異本】

『武道初心集』には原本系・松代版の他、二種類の異本が存在する。これらは原本系の『武道初心集』内の言葉を用いながら内容が異なり、松代版のように原本と比較検討することはできない。現在確認できる異本は以下の通り。

●『武道初心訓』（W七八九、一一一ブ、K）玉川大学附属図書館所蔵。全一〇〇項目、項目名あり。天保三年（一八三二）写。五巻本。

『武道初心訓』の詳細は山本真功による翻刻・解説⁽⁶⁾に詳しいのでここでは詳しく取り上げないが、その内容は『武道初心集』の用語を用いながらも原本系の五六箇条本とは大きくかけ離れており、初心集に見られない項目も少なくない。

序文には「大道寺友山翁著述武道初心集計補后撰」とあり、『初心訓』自体が『武道初心集』上の教訓を補って撰述した書であることがうかがえる。奥書によれば天保三年（一八三二）に書写が完成したというが、同時期に

出版された松代版との繋がりは見られず、『武道初心集』が単体で流布した一つの証左を示すものであろう。

●『武士道初心集』（狩一〇―一三二一―一七）『武備見聞雜記』巻六（茂木隆春『戎政著話』（宝暦七（二七五七）跋 全一六巻・付録一卷所収（東北大学附属図書館狩野文庫蔵））第一項目のはじめには以下の通り記されている。

此一卷は大道寺氏の編著、全部三巻をしるし置くものなり

武士道初心集上

大道寺孫九郎編

『抜萃武道初心集』と同じく「大道寺孫九郎編」とあるが、その内容は原本系『武道初心集』上の教訓を用いながらも、別の体裁を整えている。享保期に成立した『武道初心集』から、わずか数十年後に異本が生まれたという事実は、教訓書の伝播が想像以上に早い点を伝えてくれ、改めて『武道初心集』のつかみ所のなさが垣間見える。

以上、写本を中心に『武道初心集』を見渡してきたが、異本を除いて纏めると以下の通りになる。

所蔵	題箋	書写年	系統	冊数
1 名古屋市蓬左文庫所蔵本	抜萃武道初心集	享保一二年（一七二七）	原本系の写本	一冊本
2 京都大学付属図書館所蔵本	抜萃武道初心集	享保一二年（一七二七）	原本系の写本	一冊本
3 久保義八郎氏所蔵本	武道初心集	天明五年（一七八五）奥書	原本系の写本	上中下三巻本
4 『驚宿雜記』（国立国会図書館蔵）所収本	武道初心集	文化十二年（一八一五）序	原本系の写本	上下二巻本
5 三春町立歴史民俗資料館所蔵本	武道初心抄	文政八年（一八二五）	原本系の写本	志式參三巻三冊本
6 真田宝物館所蔵本A	武道初心集	文政一一年（一八二八）	原本系の写本	上中下三巻三冊本
7 真田宝物館所蔵本B	武道初心集 上—武道初心集 中・下一重修武道初心集	書写年代不明	原本系の刊本 上—松代版の写本 中・下一原本系に 松代版の朱書きを 施したもの	上中下三巻三冊本
8 真田宝物館所蔵本C	武道初心集	書写年代不明	原本系の写本	上中下三巻三冊本
9 龍野歴史文化資料館龍野文庫所蔵本	武道初心集	弘化二年（一八四五）	原本系の写本	上中下三巻一冊本
10 小浜市立図書館酒井家文庫所蔵本	武道初心集	嘉永二年（一八四九）	原本系の写本	上下二巻二冊本
11 久留米市立図書館雉島文庫所蔵本	武学初心集	書写年代不明	原本系の写本	乾坤二巻二冊本
12 静岡県立図書館葵文庫所蔵本	武士道初心集	書写年代不明	原本系の写本	天地人三巻三冊本（天・人は欠）
13 玉川大学附属図書館所蔵本	武道初心集	書写年代不明	松代版の写本	天地人三巻三冊本
14 東北大学附属図書館狩野文庫所蔵本	武道初心集	慶応元年（一八六五）	松代版の写本	上中下三巻三冊本
15 八戸市立図書館百仙洞文庫所蔵本	武道初心集	書写年代不明	松代版の写本	上中下三巻一冊本
16 鹿児島県立図書館所蔵本	武道初心集	書写年代不明	原本系の写本	三冊本（二・三巻欠）

現時点まで調査した一六種の『武道初心集』のうち、原本系は一三種類を数え、松代版の写本は意外と少ないことがわかる。書写年代はおおよそ一九世紀前・中期に集中するが、さらには松代版成立の天保五年（一八三七）以降も書写が行われていた事実を鑑みると、原本の広まりに気づかされる。この点から版本伝播の影で原本系が広まった事実とともに、松代版出版の後に『武道初心集』が流通したと安易に想像できない書写の傾向が見えるのである。書写につぐ書写によって広まった教訓書の一形態が今回の考察を通して読み取れるだろう。

おわりに

『武道初心集』はこれまで『葉隠』と『山鹿語類』の狭間に捉えられがちではあったが、伝播という点から見れば『武道初心集』は他の二書よりも広く読まれていた。『葉隠』は長らく秘書として扱われ、『山鹿語類』は素行の講義録という体裁をとり、そもそも教訓書として位置づけられるわけではない。一方『武道初心集』の場合、原本系のみならず数十年を経て成立した異本や松代版が

成立しており、その広がりには決して看過出来ない。いざ流通の過程や受容、そして改訂の視点から捉えると、『武道初心集』は前の二書よりも大きな影響を及ぼしたと言ってもよいだろう。友山自身「武恩の下」で生まれなかつた初心の仕官者向けの読み物を想定していた為、『武道初心集』自体特別な教訓が確認できるわけではない。しかし原本系から数多くの書が派生した事実から鑑みれば、異本や松代版の存在を通じた『武道初心集』の位置づけをはかることで、単なる教訓論にとどまらず、武士道論の研究自体に新たな視座が生まれるのではないだろうか。一つ一つの教訓書の内実を明らかにする作業はもちろん、その流通及び想定された読者層を含めた考察が求められよう。ここにおいて我々はあらためて士道・武士道論といった規定に当てはめない検討も迫られる。『武道初心集』は自筆本が現存しないため、今回の調査では諸本の系統を調べられなかったが、その広汎性は確認できた。原本系・松代版両者における写本の差はあれども、『武道初心集』自体が様々な地域で伝播されていたのである。こうして残された課題、比較検討に至るまでの舞台は整った。

古川哲史が松代藩士の高田法古謄写本に着目し、松代

版と比較した点は評価できるものの、他の写本の存在を踏まえた考察が今後は求められる。特に原本の上に松代版の朱書が入った『重修武道初心集稿』は着目すべきだろう。『重修武道初心集稿』は中・下巻のみ現存し、写本年代自体不明ではあるが、これを含めて高田法古謄写本との比較を検討しなければ『武道初心集』の本格的な比較検討にまで至らない。多様な原本系を用いた上での比較検討を次回の課題として、論考を終える。

【注】

- (1) 『武士道叢書』・『武士道全書』に収録されている書については、『国史大辞典』（吉川弘文館）参照。
- (2) 最近では笠谷和比古「武士道概念の史的展開」（『日本研究』三五 二〇〇七）、アレキサンダー・ベネット「武士の精神とその歩み―武士道の社会思想的考察」（思文閣 二〇〇九）等。
- (3) 相良亨「葉隠の世界」（日本思想大系『三河物語 葉隠』（岩波書店 一九七四））。後、相良亨著作集三『武士の倫理―近世から近代へ』（ペリカン社 一九九三）所収。
- (4) 拙稿「大道寺友山の土道論」（『文化』七一―一・二（東北大学文学会）参照）。

- (5) 原本・松代版それぞれの対校については古川哲史『武士道の思想とその周辺』（福村書店 一九五七）第三部等参照。
- (6) 国文学資料館データベースによれば、天保五年版の版本は二五冊以上確認できる。
- (7) 昭和一九年にも、久保義八郎が解説を付した原本系『武道初心集』が『大義武士道訓』という名前のもので発行されている底本は『完本武道初心集』同様、久保義八郎の個人蔵書である。くわしくは本論参照。
- (8) 古川前掲書・武田矩直「武道初心集小論―「原本」と「松代版」の比較」（『研究集録』（宮城県高等学校教育研究国語部会）八 一九六七）
- (9) 田口栄一「鶯宿雑記」内容紹介と索引」（『参考書誌研究』三六参照）なお『武道初心集』には、他者の書き込みが見られない。
- (10) 大平喜間多『松代町史』（一九二九）下巻 第六編
- (11) 滝澤貞夫「松代文庫について」（『松代―真田の歴史と文化』二 一九八九）
- (12) 『酒井家文書綜合目録』（小浜市立図書館）七頁
- (13) 春山俊夫「資料集成静岡岡県図書館史のうち 私立丁未図書館」（『静岡県近代史研究』二〇 一九九四 静岡県近代史研究会）

- (14) 『八戸市立図書館国書分類目録』二 笹木出版 一九八
一
- (15) 前掲『完本武道初心集』「解説」による。
山本真功「翻刻『武道初心訓』前・後編」〔『玉川学園女
子短期大学紀要「論叢」』二一・二三号 一九九七・一
九九八〕